

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 25 日現在

機関番号：32205

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381317

研究課題名(和文) 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期におけるキャリア教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Career-Educational Program for High-Functioning Autism Spectrum Disorders in Adolescence

研究代表者

田所 撰寿 (TADOKORO, KATSUYOSHI)

作新学院大学・人間文化学部・教授

研究者番号：80616300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、知的障害の伴わない自閉症スペクトラム障害(ASD)の青年を対象としたキャリア教育プログラムを開発することを目的とした。ASDの診断を受けた青年男子5名(プログラム開始時：平均年齢17.4歳)を対象に、年間10回、3年間で合計30回のキャリアプログラムを実施した。1年目のテーマは「自己理解」と「他者理解」とし、2年目は「就労におけるソフトスキル」、3年目は「生活におけるソフトスキル」とした。プログラムの教育手法としてASDの特徴を踏まえて「ビデオ教材」と「ロールプレイ」を中心としてプログラムを開発し、これらのプログラム内容および教育手法について効果の検討を行った。

研究成果の概要(英文)：This study developed the programs for Autism Spectrum Disorders (ASD) in adolescence. Participants (diagnosed ASD, 5males, M=17.4) got 30 session (10 sessions/year) educations about career development. Theme of the first year was “self-understanding” and “other-understanding”, the second year was “soft-skills of vocation”, and the last year was “soft-skills of life”. In this programs, also developed educational skills which were “video teaching materials” and “role play”. The results were examined about effects of career programs and educational skills.

研究分野：社会科学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 キャリア教育 グループプログラム ビデオ教材 ロールプレ 自己理解・他者理解 就労におけるソフトスキル 生活におけるソフトスキル

1. 研究開始当初の背景

文部科学省はキャリア教育に関する答申を2011年に出しているが(文部科学省, 2011)、その中で特に青年期に当たる後期中等教育において、障害者の教育機関である特別支援学校とそれ以外の定型発達者の学校を区分して述べられており、さらには高等教育においては障害者については触れられていないなど、知的障害のない発達障害者のキャリア支援についての方策が打ち出されていない現状にある。このような現状において知的障害のない発達障害者はその多くが普通高校に進学し、また大学など高等教育機関へと進学している。ここで発達障害者が受けるのは定型発達者を対象としたキャリア教育であり、発達障害者には適さない。発達障害者には文部科学省(2011)が述べるように、個々の障害に応じたきめ細かい指導・支援の下で適切なキャリア教育を行うことが重要であり、自己の抱える学習や生活上の困難について適切な認識・理解を深め、困難さを乗り越えるための能力や対処方法を身につけることが必要である。こうした点を目的としたキャリア教育は知的障害のない発達障害、特に知的な問題はないものの社会性の障害の問題は決して少なくない高機能 ASD の青年にはとても効果的であると考えられる。

申請者はこれまでの研究活動及び臨床活動において、高機能 ASD の学齢期を中心に支援を行い、高機能 ASD の特性に合わせた支援の方法として「精神健康の維持」や「所属感」を中心概念としたグループプログラムを開発してきた。しかし彼らが青年期を迎える時、就労や進路選択といったキャリアの課題と向き合うことになり、これらのライフイベントをうまく乗り越えていくためには彼らの特性、環境、保護者の意識などさまざまな要因が重要であることが明らかになってきた。

後期中等教育におけるキャリア発達の課題としては、「自己理解の深化と自己受容」「選択基準としての職業観・勤労観の確立」「将来設計の立案と社会的移行の準備」「進路の現実吟味と試行的参加」が挙げられている(国立教育政策研究所, 2002)。高機能 ASD の青年はその特性ゆえに自己を受容できていない事が多く、自己理解が不十分であることが少なくない。そのため自分に適している職業観や働くことの意味を見出すことが難しい。さらには特性ゆえに将来的な見通しを立てることが難しく、社会生活への適応を準備していくためには多くの支援を必要とすると言わざるを得ない。そして実際に社会に参画すべく行った職業体験やアルバイトなどのチャレンジは、環境の理解の少なさによって多くの場合が失敗に終わり、挫折体験としてのみ彼らの中に残っていくことが少なくないのが現実である。このようにキャリア発達の課題を吟味してみることで、反対に彼らにとって必要なキャリア教育のあり方や、

成長を促す点が明らかになってくる。

一方保護者においても、どのように子どもを支援していいのかわからないために、子どもを過度に保護するまたは極端に本人任せにする、専門機関に責任を投げてしまうといったケースも少なくない。保護者は彼らが青年期になるまでの間で、何をを行い、どのような道を作り、どのような専門機関と連携を取るのか、つまりは ASD の子どもの支援体制を構築しておく必要がある。そして青年期において保護者は、本人理解を進める事(障害特性を含めて)、さまざまな支援機関の実態を知る事、ASD の青年が職業に就くことの意味を考える事、子どもの将来への見通しを立てる事が必要となる。

2. 研究の目的

キャリア教育は子ども達の成長を支援する上ではとても重要なことである。しかしながら、通常学級におけるキャリア教育は定型発達の子どもの想定しており、社会性に困難をもつ自閉症スペクトラム障害(ASD)の子ども達に対するキャリア教育は十分に実施されているとは言えない状況にある。そこで本研究では、青年期の ASD 者を対象とした3年計画のキャリア教育プログラムを開発し、プログラムを量的および質的に評価し、プログラムの効果について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1)対象者

初年度から参加している ASD の男性4名に加え、2年目から参加した ASD の男性1名を加えた5名(平均年齢19.2歳;3年目開始時)を対象とした(IQの平均=95.2)。なお、プログラム3年目に5名のうち2名の就職が決まり、1名が就労を開始している。他の3名は大学や専門学校における学生である。

(2)調査時期

キャリア教育プログラムは3年間にわたり月に1回のペースで合計30回行った。プログラムの効果測定のための質問紙は、2013年2~3月(実施前)、2014年2~3月(1年目修了後)、2015年2~3月(2年目修了後)、2016年2~3月(3年目修了後)の計4回行った。

(3)調査方法

郵送または手渡しし、回収は郵送とした。

(4)評価尺度

坂柳(1996)による「キャリア・レディネス尺度(CRS)」

人生キャリア・レディネス尺度(LCRS)と職業キャリア・レディネス尺度(OCRS)から成り、さらに各尺度に「関心性」「自律性」「計画性」の下位尺度がある。質問は54項目あり、「よくあてまる」(5点)~「全くあてはまらない」(1点)の5件法である。

下山(1992)による「アイデンティティ尺度」「アイデンティティの確立」尺度と「アイデンティティの基礎」尺度から成る。質問は

各 10 項目、合計 20 項目であり、「よく当てはまる」(4 点)～「全く当てはまらない」(1 点)の 4 件法である。

平石(1990)による「自己肯定意識尺度」

下位尺度は「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「非評価意識・対人緊張」から成る。質問は 41 項目あり、「当てはまる」(5 点)～「当てはまらない」(1 点)の 5 件法である。

(5)インタビュー調査

プログラム終了後、参加者に対してして毎年度同様の内容(自己理解や将来の夢等)について半構造化面接を行った。質問項目は「このプログラムの復習および感想」、「自分はどんな人間だと思うのか」、「現在の自分は、5 年前の自分に比べてどんなところがどのように変わった/同じだと思うのか」、「将来、どんな人になりたいか(職業も含めて)」、「自分の ASD 特徴についてどのように理解して、どう対応しようと考えているのか」の 5 項目である。

(6)プログラム内容と教育手法

本プログラムでは、各年度ごとに年間の目標を定め、彼らの日常的なサポートも含めてプログラムを行った。1 年目の目標は「自己理解と他者理解」であり(表 1)、2 年目は「就労におけるソフトスキルの獲得(梅永,2014)」とし(表 2)、3 年目ではさらに実生活に基づいた「生活におけるソフトスキルの獲得」(表 3)とした。

プログラムを実施する中で ASD の特性を考慮しつつプログラム内容を開発した。その基本的な手法として 体験学習(ロールプレイ) 小集団で行うこと(他者とのディスカッション) 彼らの認知特性に合わせた教材やツール(ビデオ教材等)を用いた。

表 1 初年度のプログラムの内容

| | プログラム内容 |
|--------|-------------------|
| 第 1 回 | 10 年後の将来像 |
| 第 2 回 | 心理検査の体験(エゴグラム) |
| 第 3 回 | ニュースについて考えてみよう |
| 第 4 回 | 大学での就学・就労支援の実際 |
| (夏休み) | アルバイト・ボランティア体験 |
| 第 5 回 | 夏休みの体験を話そう |
| 第 6 回 | 自分で決められる力をつけよう |
| 第 7 回 | 自分で決められる力をつけよう |
| 第 8 回 | 大人になることの意味を考えてみよう |
| 第 9 回 | ジョハリの窓 |
| 第 10 回 | 皆からどう見られているのか? |

表 2 2 年目のプログラムの内容

| | プログラム内容 |
|--------|-----------------------|
| 第 1 回 | 1 年間の目標 |
| 第 2 回 | ASD の特徴を考えてみよう |
| 第 3 回 | 自分の特徴と ASD の特徴の違いは? |
| 第 4 回 | 世の中の職業について考えてみよう |
| (夏休み) | アルバイト・ボランティア体験 |
| 第 5 回 | 夏休みの体験を話そう |
| 第 6 回 | ビジネスマナー (報・連・相) |
| 第 7 回 | ビジネスマナー (アルバイト準備) |
| 第 8 回 | ビジネスマナー (コミュニケーション 1) |
| 第 9 回 | ビジネスマナー (コミュニケーション 2) |
| 第 10 回 | ビジネスマナー (まとめ) |

表 3 3 年目のプログラムの内容

| | プログラム内容 |
|--------|-------------------|
| 第 1 回 | 1 年間の目標 |
| 第 2 回 | ソフトスキル(時間管理・金銭管理) |
| 第 3 回 | ソフトスキル(余暇の過ごし方) |
| 第 4 回 | ストレスマネジメント |
| (夏休み) | アルバイト・ボランティア体験 |
| 第 5 回 | 仕事や親に対する考え方の変化 |
| 第 6 回 | 異性について考える |
| 第 7 回 | 異性について考える |
| 第 8 回 | 異性について考える |
| 第 9 回 | この 3 年間のまとめ |
| 第 10 回 | プログラムの振り返りと今後 |

4. 研究成果

(1)質問項目の得点の変化

キャリア・レディネスの結果について、人生キャリア・レディネスと職業キャリア・レディネスのいずれもが 1 年目で若干上昇したが 2 年目、3 年目と低下するという結果になっていた。現実的な職業の現状や求められるスキルについて知ることによって低下したと推測される。アイデンティティについてはこの 3 年間で大きな変化は見られなかった。しかし他の研究結果と比較すると同世代の青年と比較して低いという結果であった。これは発達障害を持つ青年たちの特徴でもある精神的発達の幼さが要因として考えられる。さらに自己肯定尺度について、全体としては自己受容がプログラムを通して若干上昇した。自己理解や自分と似た特徴を持った

他者と交流を持つことで自己受容が進んだと考えられる。その他の尺度については5人といえども個人間の差が大きく(例えば最終データにおいて「自己表明・対人積極性」については標準偏差が0.58であるのに対して、「自己閉鎖性・人間不信」は7.72であった)、単純に平均を基に解釈するのは困難であった。

(2)インタビュー結果

グループメンバーは同じASDの診断を受けているが、それぞれの特徴は全く異なる。大きく分けると「受け身であり寡黙なタイプ」と「積極的であり多弁なタイプ」に分類できる。したがって、インタビューの内容についても言葉が少なく言葉を足しながら進める必要がある対象と、あまりに多くを話すために質問者の制御が必要な対象に分けられた。

インタビューの結果から次の4つのことが明らかになった。第一に、自己理解については十分できているという者は少なく、他者理解に多くの内容が語られていたという点である。ある対象者は「他者理解ができて自己理解ができる」と説明したように、他者を意識することで自分の存在の位置づけや違いを理解していくことがあるようである。第二に、彼らなりにASDの特性に向かい合いもがいているということである。それが「個性」といえばよいのか「障害」というべきなのか、まだまだ整理がついていない段階である。これは青年期の課題であるアイデンティティの確立とも大きく関係していると考えられる。第三に、彼らは今青年期の真ただ中におり、ASDという問題だけでなく、さまざまな問題と向かい合っている最中であるということである。この葛藤がASDという特徴だけで説明できるわけでもなく、また彼ら自身説明しようともしていない。定型の青年期と同様な手助け、サポートが必要とされている。最後に、彼らは自尊心が低く、同じ特徴を持つ仲間が集まる肯定的意味をそれなりに感じていた。楽しいから参加していると答えた者もいたが、「何がよかったのかはわからない。でもこれから先も続けていくことでこのグループの意味がわかってくるのかもしれない」との感想は、ASDである彼らの特徴をよく表していると思われる。

(3)総合考察

今回のプログラム開発において、評価ツールにおいては、必ずしもプログラムの効果を示す結果が得られたとは言い難い。むしろこれら少人数のグループの研究は質的な分析が適していると考えられる。今回3年間を通じてドロップアウトしてしまった参加者6名中1名のみであったことの意味は大きい。今回のインタビューの結果からも彼らの葛藤と共に、「意味がなかったら参加しない」、「この会が続くことで、その意味が明確になる」といった感想から、継続的なグループが必要であり、今後はもう少し緩やかな会として存

続することが参加者の意思として決定した。

今後の課題として、ASDのキャリアにとって最も重要なのは職に就くことそのものではなく、就労への定着であろう。今後新たに展開されるグループ活動により、これらの就労へ定着する要因について明らかにされていくことが、ASDへのキャリア教育の最大の課題だと考える。

<引用文献>

国立教育政策研究所(2002)児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について 国立教育政策研究所生徒指導研究センター

文部科学省(2011)今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf(2016年6月25日取得)

平石賢二(1990)青年期における自己意識の発達に関する研究() - 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 - 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科 **37** 217-234

坂柳恒夫(1996)大学生のキャリア成熟に関する研究 - キャリア・レディネス(CRS)の信頼性と妥当性の検討 愛知教育大学教科教育センター研究報告 **20** 9-18

下山晴彦(1992)大学生のモラトリアムの下位分類の研究 アイデンティティの発達との関連で 教育心理学研究 **40** 121 - 129

梅永雄二(2014)発達障害者の就労支援LD研究 **23** 385-391

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

田所撰寿, 発達障害の子どもの心理発達とキャリア教育 - 青年の自立と親の子離れを考える - . 作大論集, 6, 2016, 107-126 .

大門美保・田所撰寿, 自閉症スペクトラム障害者に対するキャリア教育についての一考察. 作新学院大学臨床心理センター研究紀要, 9, 2016, 17-24 .

坂本法子・八田洋子・田所撰寿, 青年期の母子関係再構築への取り組み - 発達凸凹のある青年の母子分離に焦点あてて - . 作新学院大学臨床心理センター研究紀要, 8, 2015, 2-9 .

高木憲子・坂本法子・田所撰寿, 思春期

事例における ASD 特性と母子関係の視点—摂食障害の症状を呈した不登校の女子中学生との面接過程を通して—。作新学院大学臨床心理センター研究紀要, 8, 2015, 10-17.

大門美保・田所撰寿, 青年期 ASD 者の強迫性症状に対する認知行動療法の試み—ASD 特性に合わせた支援の在り方—。作新学院大学臨床心理センター研究紀要, 8, 2015, 40-46.

野中菜都美・植松志保・塩澤彩佳・大門美保・八田洋子・田所撰寿, 高機能広汎性発達障害児の心の健康を支援するグループプログラムの開発—小学校下学年グループの試み—。作新学院大学臨床心理センター研究紀要 8, 2015, 47-52.

〔学会発表〕(計 12 件)

田所撰寿, 発達障害の子どもを持つ保護者の親子関係についての検討: 青年の自立と親の子離れの問題。第 56 回日本児童青年精神医学会, 2016 年 10 月 27 日~29 日(予定), 岡山コンベンションセンター(岡山県岡山市)。

田所撰寿・松本浩二, 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期に対するキャリア教育プログラムの開発—教材ビデオ及びロールプレイを用いたソフトスキル獲得の試み—。日 LD 学会第 24 回大会, 2015 年 10 月 11 日, 福岡国際会議場(福岡県福岡市)。

田所撰寿・大門美保, 自閉症スペクトラム者は友人に何を求め、どのような日常活動が充実していると感じるのか?: KH Coder を用いた計量テキスト分析による質的検討。第 56 回日本児童青年精神医学会, 2015 年 9 月 30 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

坂本法子・田所撰寿, 小学校高学年の ASD 児に対する二次障害予防の取り組み: 本人・保護者・SC へのインタビュー調査による検討。第 56 回日本児童青年精神医学会, 2015 年 9 月 30 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

大門美保・田所撰寿, 自閉症スペクトラム指数と主観的 QOL の関連性: 青年期自閉症スペクトラム者への支援に関する基礎的研究。第 56 回日本児童青年精神医学会, 2015 年 9 月 30 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

松本浩二・田所撰寿, 高機能自閉症スペ

クトラム障害の青年期に対するキャリア教育プログラムの開発—プログラム実施と並行して行う個別心理支援の取り組み—。日本カウンセリング学会第 48 回大会, 2015 年 8 月 29 日, 環太平洋大学(岡山県岡山市)。

田所撰寿・伊原文恵, 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期に対するキャリア教育プログラムの開発—自己理解と他者理解を中心としたプログラムの取り組みから—。日本 LD 学会第 23 回大会, 2014 年 11 月 24 日, 大阪国際会議場(大阪府大阪市)。

伊原文恵・田所撰寿, 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期に対するキャリア教育プログラムの開発—保護者支援グループの初年度講座と参加による「親のストレス」度及び心理特性の変容—。日本 LD 学会第 23 回大会, 2014 年 11 月 24 日, 大阪国際会議場(大阪府大阪市)。

坂本法子・田所撰寿, コミュニケーションの不得手な大学生に対する学生生活支援に関する研究—大学院生によるピアサポート体制構築への取り組み—。日本 LD 学会第 22 回大会, 2013 年 10 月 13 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

志賀タミイ・松本秀彦・田所撰寿, 広汎性発達障害児のこころの健康を支援するグループ活動に関する研究—CBCL 等によるグループプログラムの効果測定の結果から—。日本 LD 学会第 22 回大会, 2013 年 10 月 13 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

田所撰寿・伊原文恵・岡本緑, 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期に対するキャリアプログラムの開発—プログラム参加者のキャリア成熟度および心理特性の検討—。日本 LD 学会第 22 回大会, 2013 年 10 月 13 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

伊原文恵・田所撰寿・岡本緑, 高機能自閉症スペクトラム障害の青年期に対するキャリアプログラムの開発—保護者支援グループ参加者の「親のストレス」度および心理特性の検討—。日本 LD 学会第 22 回大会, 2013 年 10 月 13 日, 横浜コンベンションセンター(神奈川県横浜市)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田所 撰寿(TADOKORO KATSUYOSHI)

作新学院大学・人間文化学部・教授
研究者番号：80616300

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
松本 浩二 (MATSUMOTO KOUJI)
関東学院中学高等学校・専任カウンセラー

大門 美保 (DAIMON MIHO)
守谷市療育教室・指導員